



## 台湾ランニング事情 第3回 2012 台北マラソン

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員兼助理教授）

亜熱帯の台北でも11月以降は涼しくなり、本格的なロードレースシーズンになる。台湾のロードレースの中でも最も認知され、規模の大きい大会は毎年12月中旬に台北市内で開催される「台北マラソン」である。

同大会には例年「10万人以上」の参加があり、沿道の応援者も多い大会であるだけでなく、数年前からは海外から招待選手を招く賞金レースにもなっている。小生にとっても、昨年の同大会で初のフルマラソン体験となった今レースを報告する。

### 1. 台北マラソンの歴史沿革

毎年12月に台北で開催されるマラソン大会はスポンサーである富邦金控（Fubon Financial Holding Co.）の企業名を冠した「富邦台北マラソン」と呼称される。

同大会の主催者は台北市政府と中華民国ロードレース協会（中華民国路跑協会）、指導単位はスポーツ行政を担当する行政院体育委員会の名前が連ねられている。大会会長には郝龍斌台北市長が就くなど官民協力のもとに実施されているレースである。

同大会は台湾におけるロードレースで最も規模が大きく、知名度が高いものであるが、歴史を調べて見るとその変遷もまた興味深い。同マラソン大会は、未だに戒厳令が施行されていた1986年に「台北国際マラソン」として始まったが、当時は理由は不明なるもフルマラソンではなく12キロ、23.5キロで実施されていた。その後、台北市内の地下鉄工事のため1990年から2000年の間は中断されたが、地下鉄工事の影響を受けない高速道路を利用した「国道マラソン」が1996年から開催され、右に「台北マラソン」の名称は引き継がれていた。（2001年から台北マラソンが復活したことにより、「国道マラソン」は一時中止になった



1 スタート前の様子



2 ゴール付近の様子

が、2002年以降は、毎年3月に台北市内の高速道路を利用した「台北国道マラソン」、12月には一部市街地を走る「台北国際マラソン」を実施することとなり現在に至っている。

2004年に外資のINGグループが正式なスポンサーとなることで大会の名称も「ING台北国際マラソン」となった。2008年にはING社が台湾での経営権を台湾大手金融機関の富邦金控に合併されたのに伴い、2009年以降の大会では「富邦マラソン」の名が定着するようになった。そのため台湾では通常「20〇〇富邦マラソン」と呼ばれている。また、開催回数に関しては、スポンサー名を冠するようになった2004年大会を第一回として、本年の大会が第9回目の大会と呼称されることが多い。

9回の歴史を紐解くと、前回紹介した陽明山ロードレースと同様に、当時台北市長の馬英九総統が2006年大会の9K部門に参加し、54分59秒で完走している記録も確認できる。(http://www.sportsnet.org.tw/score\_ing9.php)

## 2. 大会概要

2012年12月16日に開催された「2012富邦台北マラソン」の概要を、参加者に送付されたパンフレットを参考に紹介する。「10万人参加の大会」と謳っているものの、フルマラソン、ハーフマラソン、9キロの有料種目の参加者数は、それぞれ7千、1万8千、1万8千であり、最大で合計4万3千人である。また小学生を対象にした「児童組」(600)、警察消防関係者を対象にした「警消組」(1200)を含めても合計では4万5千人に満

たないが、右種目以外にレース当日に無料で参加できる市政府周辺の周回3キロコースを走る(歩く)「Fun Run」がある。右レースは、先着1万人が記念品をもらえるとの紹介があった。このFun Runには例年、5万人以上の参加があると言われている。

表1は「2012富邦台北マラソン」のレース種目の種類と参加費用の概要である。参加費用には、フルマラソンの場合、ランニングシャツ、バスタオル、完走メダル(完走者のみ)、スポーツドリンク、コンビニ弁当などがつき、レース後に計測チップを返却すると100元戻るシステムになっている。台北マラソンは市民参加型レースである一方、「国際マラソン」という側面を強調するように海外からエリートアスリートの選手を招く「賞金レース」でもある。同パンフレットには12名の招待選手が顔写真付で紹介されているが、残念ながら日本からのエリートアスリートの参加者の名前は見られなかった。

表2はフルマラソン上位者が獲得できる賞金金



3 ゴール付近の様子

表1 レース種目の概要及び参加費用

種目	42キロ	21キロ	9キロ	児童(2K)	警察消防
参加費用	1000元	800元	400元	無料	無料
時間制限	5時間30分	3時間30分	90分	30分	90分
参加人数	7000	18000	18000	1200	600
開始時刻	0700	0730		0930	0730

表2 マラソン上位入賞獲得賞金一覧

1位	120万台湾元 (大会記録は200万元)	6位	5万台湾元
2位	50万台湾元	7位	4万台湾元
3位	30万台湾元	8位	3万台湾元
4位	10万台湾元	9位	2万台湾元
5位	7万5千台湾元	10位	1万台湾元

表3 台北国際マラソン過去6年の優勝タイム

	男子優勝タイム	女子優勝タイム
2005	2時間11分54秒	2時間33分39秒
2006	2時間11分5秒	2時間30分56秒
2007	2時間17分9秒	2時間33分1秒
2008	2時間15分37秒	2時間30分44秒
2009	2時間15分57秒	2時間30分5秒
2010	2時間14分4秒	2時間30分37秒
2011	2時間10分24秒 (大会記録)	2時間27分36秒 (大会記録)
2012	2時間15分27秒	2時間30分19秒



4 ゴール付近の様子

額一覧である。世界最高記録樹立時には100万ドルという超高額報酬のあるマラソン大会と比べると、見劣りするが、プロランナーとしては、参加を考慮できる大会のはずである。

例年成績上位者は海外の招待選手に独占されるため、同大会では台湾人上位枠も設けられており、「台湾人アスリートのマラソンへの挑戦を鼓舞するため」に台湾人の男女トップには、20万元の賞金が授与されると記されている。また、ハーフマラソンの優勝者には5万元、9キロレースの勝者にも2万元が授与されると紹介している。

表3は、主催者の中華民国ロードレース協会のホームページで確認できる2005年以降の男女別の優勝タイムである。2011年のレースでは、男子が2時間10分台、女子も今大会で初めて30分の壁を破る27分台の大会新記録を更新し、勝者は200万元の賞金を獲得している。

今大会のパンフレットに紹介された国際エリート選手リストには、男子7名(ケニア6、エチオピア1)、女子5名(全てケニア)が顔写真付で紹介され(残念ながら筆者が知っている選手はいなかった)、最高記録は男子が2時間7分台2名、8分台2名、9分台1名、10分台2名。女子は21分台を筆頭に6人26分以内のベスト記録という「豪華メンバー」が名を連ねていた。

また走る実際のコースは、「台北マラソン」とは言いながらも、交通規制等の問題もあることから、市街地を走るのは、スタート地点の101ビルを見上げられる市政府から市内でも指折りの目抜き通りの仁愛路から中山北路の約8キロの後は、基隆河沿いの路を約30キロ走り、最後の約5キロだけ市街地を走るコースとなっている。

### 3. レース結果と雑感

新聞報道では、4万5千人のレース組、8万人以上のFun Run参加者で合計12万人以上が参加したと報じられた。<sup>1</sup>TVニュースや新聞の写真で見る限りは、対外的に宣伝してきた「10万人規模のマラソン」という約束は守られたようであった。

レースはエリート組と一般参加者を区別するためエリート選手だけ定刻の3分前の6時57分に号砲。一般参加者は3分遅れの7時にスタート。優勝は、男子はケニアのJOSHAT KAMZEE JEPKOPOLが2位と2秒差、3位と7秒差の激戦を制したが、記録は「平凡」な2時間15分27秒に終わった。女子も、マラソン王国ケニアのCAROLINE CHEPTONUI KILELが歴代2位の記録となる2時間30分19秒で優勝した。なお、台湾人では、蒋介石が2時間19分14秒という「好記録」で20分の壁を破り、優勝したJEPKOPOLから潜在能力を評価され「ケニアで訓練を受けたらどうかと薦められた」と報じられた。<sup>2</sup>なお、台湾の男子マラソン最高記録は2時間14分35秒であり、20分を切っているのは7人、蔣の今回の記録は本人にとって2番目、台湾歴代7位に相当するタイムであった。

当日の気象条件はスタート時の気温20度、湿度83%とこの季節にしては、温度湿度ともに高めであった。(筆者ゴール時の11時台の気温は25度、湿度70%)この気象条件については、男子優勝のJEPKOPOLが、「暑すぎた、もう少し早い時間のスタートなら、選手にとっても良かったであろう」と指摘したように、筆者も10時頃に陽が照り付けた際には、「脱水症状になるのではない」とかと心配するところもあったが、実際に暑さから熱中症や軽いショック症状に陥る者もいたが、医療関係者の迅速な処置により大事に至る選手は無かったとの由であった。確かに、多くの台湾の



5 40キロ地点の筆者、バックは101

ロードレース大会のように6時スタートであれば・・・とは思った。

蛇足になる筆者自身の走りであるが、昨年同大会は、装備も調整もあまり考えずに臨んだが、多くのマラソン本が指摘するような教科書どおりの運命に陥った。すなわち、30キロまではそこそこ快調に走れたが、最後の10キロに100分近くも要する「完全失速状態」となり、言うようにしてゴールにたどり着き4時間47分台という「屈辱的な」初マラソンとなった。「屈辱」から1年、本格的な練習を積んだとは言い難いものの、若干の失敗経験を重ねた状況で臨むことになった4度目のマラソンは、昨年はあちこちで散見された「日本頑張ろう」、「台湾ありがとう」のような日台友好アピールの言葉をゼッケンや背中に記した日本人ランナーとの出会いもなく、黙々と走る。25度の暑さと格闘しながらも余力を残し？30キロを2時間48分台で通過し、一瞬だが「サブフォーも夢ではないか？」との期待がよぎったが、35キロ過ぎに「想定内」の失速を起し、その間に「4時間」と書かれた風船を帽子にくくりつけたペー

表4 完走者人数一覧

種目	完走男子	完走女子	完走合計
フルマラソン	4279	295	4574
ハーフマラソン	13088	2129	15217
9キロ	9093	5337	14430

サー？（だと思）にも抜かれ、ゴール目標を「4時間5分」、「4時間12分」と自己下方修正しながらも、昨年のような「大失速」をすることなくどうにか4時間14分でゴールできた。昨年のレースより33分短縮し、台南マラソンの記録を27分上回る自己ベスト更新となったが、「もう少し行けたはず」という後悔を残したレースとなった。

表4は各レースの完走者の統計である。フルマラソンは定員上限の7千人の参加があったとしても6割ほどの完走率であり、また女子の完走者が男子の1割にも満たない少なさは際立った。21キロと9キロの完走率が8割前後ということを見ると、フルマラソンの制限時間5時間半は、気候の厳しさを考えれば誰でも完走というわけにはいかないようだ。



6 ゴール地点の筆者

#### 4. 気がついたことと展望

最後に、大会運営について善処すべき点を指摘したい。一つ目は、筆者は15分前からスタート地点に並び終えていたが、エリート組の号砲まで10分を切った時点で、アフリカ勢と思われる招待選手が護衛もなく慌てて後ろから人をかきわけて前に進む姿を目撃。「スタートには間に合っただろうか」と他人事とはいえ心配しながらもゼッケン番号を確認しておき、レース終了後に確認したら、何とあたふたと人並をかけ分けていた選手は優勝したJEPKOPOLであった！。「大会関係者の不備で先導を怠ったのか」、「選手自身のミスなのか」は不明なるもスタート10分前の時点で有力選手がスタートラインに欠けていることに気がつかない関係者には問題はなかったのか？試合前に無駄な体力と精神力を遣ったことは、気の毒に

思えたが、同情のし過ぎであろうか？

二つ目は、スタートから仁愛路を走る4キロ地点には中央4車線にしか、チップが反応する「絨毯」が敷いておらず、筆者を含め一部のランナーは、「絨毯」が敷かれていない一番右側の道路を走っていたため、4キロ通過時に自分たちの走っている道路に絨毯が無いことに気づき、慌ててバレーの柵を乗り越えて中央車線に戻る一幕があった。多くの警察関係者とボランティアで成り立っている大会とはいえ、関係者のランナーへの走行場所に対する指示は何もなく如何にもずさんな感じがした。

最後は、「台北マラソン」に直接参加していない住民のマナー問題である。大会終了後、台北市長は市政府の会議で「台北市民が受け入れられるという前提の下に、都市型マラソンへの申し込みを

検討したい」との発言があった。同発言は東京マラソンを意識したものかもしれない。右に対して中華民国陸上協会関係者は「都市型マラソンが国際組織に認証されるには交通規制問題が重要である」と述べていたが、<sup>3</sup>台北市民のロードレース実施時の交通規制に対する不寛容さは、改善の余地が大いにあると感じた。

台湾社会では横断歩道でも基本的に「車両優先」で「譲り合いの精神」が欠けていることは、台湾在住者に長く共有されている認識である。今レース中にもバイクの運転手が、交通規制の警察に文

句や罵声を浴びせたり、制止を振り切り、急発進で道路を横切る姿は時々見かけた。現在のコースで市街地を走るのは全体の3分の1にも満たない12-3キロであるが、東京マラソンのようなレースを実施すると、交通規制の範囲と時間は大幅に増え、市民生活への不便さも増大することになる。もし都市型マラソンが実現できれば、総統府、中正記念堂、101ビル、孔子廟などの著名観光スポットを回り、観光効果も抜群であり、走る側としても普段走れないところを走れる楽しみが持てるランナーとしても待ち望まれる。

<sup>1</sup> 「12万人创新高没跑出新紀錄」『聯合報』(2012年12月17日)頁B4。

<sup>2</sup> 「跑進2:20 蔣介文振臂呼」『聯合報』(2012年12月17日)頁B4。

<sup>3</sup> 「挑戰『城市馬拉松』交管是關鍵」『聯合報』(2012年12月19日)B1。